

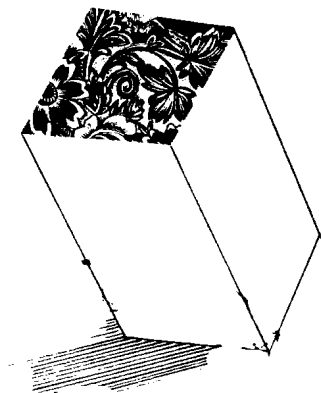
芹澤光治良作品集

第二卷



未完の告白 花束

芹澤光治良



新潮社版

未完の告白・花束

〈芹澤光治良作品集2〉

昭和49年5月10日 印刷
昭和49年5月15日 発行

定価 800 円

著 者 芹 澤 光 治 良
発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町71
電話 (03) (260) 1111(代表)
郵便番号 162
振替東京 808

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 新宿加藤製本株式会社

© Kojiro Serizawa 1974 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

未完の告白

5

花束

105

女にうまれて

227

装
画
司
修

芹澤光治良作品集

第2卷

未完の告白

若い友××君に獻す

君の友情がなければこの小説はう
まれなかつたろう。君のまことが
私にこれを書かせたのだ。

序 章

——小説家持岡氏の付記——

野村年衛君が私の家に遊びに来るようになったのは、一高に入学して間もない頃であるから、五、六年も前のことである。私の末弟と寄宿寮で同室であつた関係で、末弟がつれて来たのだが、いつの間にか家の子供等も親しくなつて、従兄いとこでもあるかのように、野村さん、野村さんと慕つていた。末弟と一緒に来ては、夕食の後に、子供等とピアノを叩いたり、トランプをして遊んだものだ。

一高を出て大学へ入学した年の暮に、学徒出陣で出征して、一昨年（昭和二十年）の秋無事復員した。復員すると野村君は以前よりもしばしば家に遊びに来た。私の末弟が復員すると、東大を辞めて京大の文科に転じたために、家の子供等が、野村君を末弟の身代りのように慕つて、誘惑するからであらう。

私の家には帝大や一高の学生がたくさん訪ねて来るが、誰も私に会つて雑談するのが目的であつて、家庭的に親し

くする者はごく少ない。野村君の場合は例外である。

しかし、野村君は親しくなつても、家庭のことや個人的なことを話さなかつた。個人的なことを語るのを恥辱だと考えたのであらうか、それとも若者らしい見栄みえであらうか。それ故、野村君の父が何をしているのであるか、兄弟があるのか、私の家では誰も知らなかつた。ただ礼儀正しい聡明な青年で、私はこんな息子があつたらとよく思つたほどで、恐らく家庭も立派であり、特に母親が偉い人ではなからうかと、想像した。

野村君はこの三週間ばかり私の家に来なかつた。旅行ならば旅先からハガキをくれる筈だが、病氣ではなからうかと、家人は噂うわさした。三週間野村君が来ないことは全く異例であつたから。或る日、お見舞状でも出したらと、話しているとき、ひょっくり訪ねて来た。顔色もさえなかつたので、やはり病氣だつたなど、思つたが、元氣もなかつた。私の子供等が、野村さん野村さんと、つきまとうと、困つたようにただ微笑しているばかりで、最後に、

「今日は先生にお話があつて来たのですから、後で遊びましょうね」

と言つて、子供等をさけた。私は間もなく野村君を二階の書齋に案内した。案内したというと広そうだが、戦災にあつてようやく手に入れた借

家は小さくて、二階の六畳を仕事部屋にしているが、家具もなく荒れていて、階下の話が一つ一つ手にとるように聞える。二階へ行こうかといっただけである。

冬になっても出ず座蒲団がなくて夏蒲団である。野村君は座蒲団に坐りながら、

「実は母が亡くなりまして……お伺いできませんでした」と、無表情に言った。

「ああ、お母さんがね、それはお力落しで……」

と、答えたが、彼がお母さんについて語るのも、それが初めてであり、私は言葉のかけようがなかった。

「長くおわづらいになって？」

と、問うのがせきの山だった。

「腸の閉塞症とか申して、急でしたが、戦争中の過労のためだろうと思います」

ふだん野村君が個人的な生活について語るのを、下賤なことのように入れて避けるので、私もむりに野村君に語らせるようなことはしなかった。しかし、この時は野村君の方から話し出した。

「母が亡くなりましてから、遺品を整理していますと、長い手記が出てきました。私の出征している間にぼつぼつ書いたもののようです。戦争の様相がきびしくなつて、東京におつても、爆死するかも知れないと覚悟して、母は手記

を書くことで、自己の一生を省みるとともに、爆死した後

に、私にその一生を知らせたかったのだらうと思います。

母の一生と申しましたが、別に他人に誇ることのできるよう

なものでもありませんが、ただ處々しく正しく生きよう

としたのでしょうか……ふだん母は決して自分を私に語り

ませんでしたから、私はその手記を読みながら真の母を発

見したように驚きもし、喜びもしました。生きている間、

たいへんいい母で、私に理解があつて、嘗て私も母を悲し

ませたことはありませんでしたが、母も私を悲しませたこ

とがありませんでした。どんな母であつたか、いつか先生

にお話したいと思いましたが、今はその必要がなくなりま

した。と申しますのは、その手記の扉に、先生に読んでも

らいたいという意味のことが書いてございますから。それ

を読んでいただければ、母のことはすっかり分つていただけ

ますでしょうし、持参いたしました。お暇の時に読んでや

つて下さい」

そう言つて、野村君は風呂敷包から、二冊の大学ノート

を出した。

私はすぐその大学ノートをひらいた。一冊のノートの扉

に、「年衛よ、これを読んだら、持岡先生に献じて下さい」と、書いてあつた。

野村君のお母さんが、どうして私にその手記を下さつた

のか、その真意が私には分らなくて、不審でならなかった。長い間野村君を指導してあげた感謝のしるしのつもりであらうかとも想像した。それも、野村君がそれまで家庭の話をしてくれなかったので、はつきり想像のしようもなかった。私はその時も野村君の顔を見上げたが、やはり彼は何も説明しなかった。それ故、私は親しくしている野村君をよく識るためにも、その手記を読むことは、興味のあることだったから、野村君の帰るのを待ちかねて、読みはじめた……

しかし、私は少し読んで行くうちに、自分の血が全身から退くように感じられた。というのは読みはじめた時に、その特徴のある男文字のような手蹟は、たしか見たことのあるように感じられたが、読んで行くうちに、それもその筈で、私の若い日に、数年間、お互いにせつない手紙と恋情とをとりかわした女人であったことが、次第に分って来たから……

若い日に、運命的に出会って別れた男女というのは、一生涯よしあしはともあれ心に痕をのこすものであろうか。私は喜ばしい日、悲しい日、ふと心にさすかけのように安部万寿子という女性を思い出した。

あの人はどうなったか、どう暮しているか、あの人と生活を共にしているのであったらどうであらうか——という

ような考えが、心のなかに泡のように浮んで来たものだ。この考えは、妻に対して申し訳のない、気の毒な、不貞なことであるが、どうにもできなかった。美しい人ではあり、聡明で、女子としては最高の学問をした人であり、大きな理想を抱いていたので、必ず世の中の表面にたって活動するであらうと、私は期待して、この二十年ばかり、それとなく、彼女の出現を待ったが、ついに社会の何処へかくれてしまったか、私の目にはふれなかった。

私は小説を発表しているので、世間のなかで裸に生きているようなものだが、恐らくあの人は社会の何処かで、私をじっと見まもっているであらうと、自分を鞭うったこともあった。あの人は私の作品のなかに自分を発見することがあろうと思って、襟を正したこともあった。しかし、私はその人を何処にも発見できないような淋しさを感じていた。

その女性は二十幾年前に、私の前から姿を消したが、姿を消した時に、私の心にほんとうの自分をおいて去ったようだった。私はその女性が私の心において行った彼女を、この二十数年あたたため、育んで来たような気がする。

その女性が私の心からほんとうに姿を消したのは、私がこの太平洋戦争でさんざん悩んだ末に生死の間を彷徨し、戦災にもあい、敗戦後の社会的な混乱のなかで社会革命に

ぶつかり、人間的な苦悩のあらゆるものを体験してからだった。この一年ばかり私の胸には彼女のことが泡のようにも浮ばなかった。

しかし、私がこの人のことをすっかり心のなかで洗ってしまった期間に、この人は毎日のように孜々と手記を書いていたのだろうか。そして、心のなかで消えたと想った姿を、私は手記のなかで、二十数年前に愛しあった時よりも鮮やかに発見したのだった。不可思議な縁というべきであろうか。

それはともあれ、私はそのノートを前にして大きな疑問にぶつかった。

野村君はお母さんと私との間にそんな心の交渉のあることを知っていたのであろうか。野村君はこの手記によって、私とお母さんとの関係を知ったのであろうか。私はそんな興味と不安の他に彼女の心のなかに、私というものが、どんな風にあったかと、不安をともしなれた戦慄で、その手記を読みつづけたのだった――

第一章

年衛を偲びながらこの手記を書こうと思いついてから、私はこのノートを用意したまま幾日になるであろう。一行も書けない。

どういふ訳であろう。どこかに見栄があつて書くきつかけを逃してしまふからであらうか。

やはりあの人に逢つた頃から書き始めなければならないのだろう。あの人に逢つて、はじめて私は自分というものを、はっきり感じたのだから。あの人によって私というものが、安部という家から独立した人間であることを、はっきりさせられたのであったから。

それは、私が津田英学塾を一年でやめて、東京女子大に入学しようかと迷っている時であつた。たしか冬の休みで、私はA市の海岸の別荘に行っていた時、あの人は私の前に現われたのだった。まだ一高の三年生であつた。

あの人は母を訪ねて来られた。あの頃、母は弱くて、その気候のよい別荘にくらいしていたので、私は父や姉や弟達と、週末にはよくその別荘へ行つたが、あの人が来られた日、父がいなかったから冬休みであつたらう。あの人が母

を訪ねて来られたのは、どんな訳があったか、その時は知らなかった。あの人の故郷が、別荘のあったA市であったから、私の知らない用事で来たものと気にもとめなかった。夕食の時に、食堂へ出ると、あの人は食卓にいらして、母がみんなに紹介した。

「持岡さんといって、ここの中学を出て、今一高の三年生ですよ」

私はあの人が優しい目をしていことにすぐ気付いたが、その優しい黒い目が時々大きく見開いて輝くことに驚いた。唇をくいしばって無口であるが、話をする時にその声のすんだテノールが熱と力とを帯びるのにも驚いた。何を話したか忘れたが、たしか文学談をして、夜おそくまで話していつに泊ってしまった。初めて訪ねた家へすぐ泊るという常識を無視した態度にも私は驚いた。その翌朝ではなかったらうか、松林をとりいれた砂原の庭で私は、母をまじえて、弟と四人で雑談している時、あの人は私の学校をきかれた。

「津田にいますが、東京女子大へかわろうか、迷っているの」

そう答えると、

「どうしてですか」

と、まるで咎めるような問い方をした。

「津田は英語ばかりに追われて、ほんとうの勉強ができませんの。英語をいくら勉強しても、技術を修得するようなもので、人間はつくられませんが。東京女子大でもっと自由に勉強したいと思います」

「東京女子大では自由に勉強できるのですか」

「新渡戸博士が建てた自由主義の大学で、講師も、博士のお弟子で新進の学者が多いですから」

「例えばどんな学者がおられますか」

「帝大の川井先生や大外先生など——」

と、その頃の新進の経済学者の名をあげた。

「それなら迷うことなくかわったらいいでしょう」

あの人の自信にみちた言い方に、私はただ呆れて笑いそうになったが、あの人が余り真面目な表情であったから、笑いをやっこらえた。その日も夕方まで、あの人はいられた。話が特に上手でもなかったが、話題が豊富で、あの人がいると、母も姉も退屈を忘れるようだった。光芒を持って、近づく人々をその光芒のなかにまきこんで、たのしくするようところがあった。

その休暇中に、又あの人が訪ねて来ればよいがと、心待ちにしたが、ついに来なかった。それから東京に帰って、二カ月ぐらいい後に母が東京の家にいる時、あの人は突然訪ねて来た。

学校から帰ると、座敷であの人の声がした。その声を横越しに聞いただけで、私はあの人だと分ったが、また、自然に全身に血潮がかけまわった。それと同時に、あの人 came 来たことを訳もなく喜ぶ自分が、恥ずかしくもあった。それ故、母とあの人とが座敷で話していることを知っていたが、私はわざとあの人を無視するように、母へ挨拶もしないでいた。それでいて、私は座敷の話しに気をとられて、机の上にひらいた書物が目にはいらなかった。どのくらいたったか、待ちきれない思いでいた時、母が剛に立ったらしく、私の部屋の前を通りながら、

「万寿子、持岡さんが来ていますよ、座敷へいらっしゃい」と、呼んだ。私はいいやや挨拶に出たという様子で、座敷へ行った。その日も、あの方は家で夕飯をすませて、さんざん面白い話をして、寄宿寮の門限にやっと間にあう頃帰って行った。

それから、あの方は東京の家へよくいらしては、夜中まで遊んで帰ることが多くなったが、それがいつも母のいる時で、しかも父のいない日に限っていた。その秘密を私は発見して、母が東京に出ている時、父が旅行で留守の日など、持岡さんが遊びにいらっしゃるなどと心待ちにしたが、それがあの人に通ずるかのうちに、あの方はきまづ訪ねて来た。後で知ったことだが、母は上京中に父のいない日

を、あの人に、手紙か電話で必ず知らせて、それ以外の日には、あの方は訪ねて来ないことになっていた。

母とあの人との秘密を知って、私は衝撃を受けて恥ずかしいかな不安や好奇心をもっているいろいろ二人の関係をさぐったものだ。

しかし知ってみればなんでもなくて、あの方は貧しい家庭で学費に窮して、家庭教師をしたりして、学費を稼いでいたが、そんなことに勉強を妨げられることをおしんで、母が学費の一部分を補助することにしたのだった。母は弟の中学の校長などに頼まれて、数人の貧しい学生に学費を提供していた。そのうちの二人は東京の私の家から通学していた。母が貧しい学生に経済的な補助をすることを、父はあまり喜ばなかった。それ故、母はあの方のことも父に内証にしたのであろう。父はどこか頑固なところがあるので、母は無益に父を刺戟することもないと考えて、あの方のことを父に内証にしたのであろう。

それにしても、父に内証にしているのに、たとえ父の留守の時であっても、何故母はあの方の家へ招いたのであろうか。学費を補助している他の学生を、決して家に招くようなことはしなかったから、恐らくあの方のよい影響を私や弟へ期待したのではなからうか。それであれば、母の考えは成功した。あの方は会う人の心に誰にも高いあこがれ

を点火し、向上心をそるような才能を持っていて、私にしても弟にしても、あの人から芸術の世界の扉をひらいてもらい、読書指導をうけたようであつたから。

思えば、あの人との文通は、読書指導のことから始まつた。私はあの人から書物を借りて読んで、その読後感を書いて送り、あの人から、読みの浅い点や誤りを指摘してもらつて、再び精読して、あの人が家へ来た時に、二人でその書物について語るのが常だつた。特に、私があの人のおすすめに従つて東京女子大に入学し、あの人帝大の経済学部に進んでからは、その書物が文学書ばかりでなくて、経済学の書物や社会学の書物も多くなつた。私の前には難かしい社会科学の門も、あの人によつてひらかれるようになった。特にあの人傾倒した東大の若い川井助教や大外教授は、私の女子大の講師もなさつていたので、私達ははなれて同じ学問をはじめたようだった。ところが、私にもあの人にも悲しい事件が、思わざる時に起きた。

それは当時東京帝国大学の経済学部で森戸事件という大事件が起きて、世間を騒がせたことがあるが、その事件が偶然のことから父とあの人とを永久に敵にさせてしまった。

森戸事件というのは森戸教授が、経済学部の機関雑誌にクロボトキンの学説について論文を発表したところ、その論文が時の政府の忌諱にふれて、教授は朝憲案乱罪にとわ

れ、大外教授も雑誌の編輯者としての責任を問われて休職になり、大学の内部にも森戸博士を擁護する者と起訴も止むを得ないとする者と二派に別れて、激しく論争した事件であつた。

私も悪かつたのだが、あの人にその発禁になつた雑誌を持ちあわせていたら貸して欲しいと手紙を出した。あの人郵送してくれるものとばかり思つていたが、発禁の雑誌であつたから、あの人手渡そうとして、前ぶれもなく、私の家へ来られた。その日、私は学校で放課後研究があつておそくなつたし、母も買物に出て留守の間に、あの方はいらしたが、女中は何も知らないで、いつもの通り待つてもらつても、あの人を通してしまつた。

その日は、運悪く父が宴会もなくて、母や私より早く帰宅した。そのために、母はあの人を父に紹介しなければならぬはめになつた。母がどう紹介したか知らない。父は機嫌よくあの人に、夕飯をすませて帰るようにと、むりにひきとめた。それ故、母も私もほつとした。

父は毎晩少量の晩酌をするが、儀礼上あの人にも杯をすすめた。あの方は酒も貰もたしなまないので、あっさりそうこつた。それが父をよろこばせたことは、はたの者にもよく分つた。父はあの人に色々の質問をした。メンタルテストのつもりであつたろうが、その頃、問題であつた

森戸事件が当然話題になった。

父は大きな工場を経営しているが、教育もあまりないから、森戸事件についても、新聞に書かれた以上には知らず、クロボトキンの学説ももちろん知らなかった。森戸事件を父が話題にしたのも深い意味があるのでもなく、その日の天気の挨拶ぐらいのつもりであったが、あの人はそうは気がつかなかった。

「君は森戸教授を是とするかね、否とするかね」

と、父は訊ねたが、否としますと、あっさりした答えを待ちもうけていたが、あの人は、

「私は是とします」

と答えた。

「すると君は社会主義者かね」

「私が社会主義者であるか否かは問題ではありません、あの論文が真理を曲けているか、ほんとに朝憲を紊乱するか否かが問題です。貴方はあの論文をお読みですか」

「発禁になった論文を読むことはできないし、たとえ読んでも、読む興味は持たん」

父は怒ったように顔面神経を動かして、不機嫌にそう言ったが、あの人はそんなことに無頓着に、熱心に森戸教授の論文の説明をはじめた。あの一流の話し方で、熱情をこめて、相手を同意させないではおかしいような調子であ

った。母や私や弟はその話に感心して、クロボトキンの思想がよく分ったような気がしたが、あの人の話が理路整然として、熱がこもればこもるほど、父はにがり切った顔をして、沈黙して、激怒をやっと我慢している様子であった。私や母は父の癖を知っているから、今にも父が怒鳴りはしないかと心配しながら、あの人の話の終るのを焦慮して待った。しかし、あの人も急に白々しくなった空気に気付いたらしく中途で話をやめると、てれかくしにご飯を召上った。それからすぐ下宿へ帰って行った。

その後が大変であった。父は怒って、あんな社会主義の男を家へ入れてはいかん、男を見る目は男にある。以後一切あの男と交際してはならんと家族の者全部に申しわたした。そして、母には明日あの人にそう宣言せよと、きつく言った。私にしても母にしても、あの人を弁護すべきだと思ったが、弁護することで、父を怒らせることが明らかであったから、父の命令に服するように装った。

母は今まで通り父に内証で、あの人を補助しようと考えていた。今に父の誤解もとけるであろうが、それまでは、父に内証にしなければならぬと、その夜のことを、母はくわしくあの人に書き送った。東京ではもう家に訪ねて来ない方がよいとも書いた。母はその手紙を私に見せた。

その手紙を見た時、そしてもう会う機会がないと思った